様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３８６

研究課題名（和文）タイ近代小説の構造的特質の研究

研究課題名（英文）On Study Structural Features of Thai Modern Novels

研究代表者
宇戸　清治（UDO, SEIJI）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：３０１８５０５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通じ、タイ近代小説の構造的特質には通時的なものと共時的なものがあることが分かった。前者では、タイの小説が思想や宗教という大きな体系の一部を成しており、文学が哲学や思想にまで影響を及ぼしている日本とは正反対である。また表現手段についても、近代小説とそれ以前の古典文学では断絶がある。後者では、物語の構造がエピソードの連環に留まり、人間や社会が多面的、重層的に描かれていないことが判明した。さらに特定の作品をコード分析した結果、言論統制の時代には政府批判のため、暗喩などの手法が多用されたことが分かった。近代小説を構造、物語、思想によってジャンル分けできたことで将来のタイ文学研究の基礎が整った。

研究成果の概要（英文）：This study found that Thai modern novels have two structural features. Those are diachronic feature and synchronic feature. In the former, Thai novels form parts of a big scheme such as thoughts or religion. It is just the opposite of Japanese literature that have an effect to philosophy or thoughts. In Thai novels, there is also disconnection of expressive style between modern novels and classical literature. On the other hand, in the latter, narrative structure is limited to a chain of episodes so that people and society are not expressed from the multifarious or multi-layered perspective. As a result of analysis codes of specific novels, the approach of metaphor was often used in order to criticize the government in the era of regulation of freedom of speech. This study divided Thai modern novels according to structure, narrative and thoughts, so thereby that made the basis of Thai literary study.

研究分野：人文学

キーワード：タイ　近代小説　物語構造　コード分析

１．研究開始当初の背景

(1)1970 年代以降、日本では東南アジア地域との経済活動を中心とする結びつきが深まる中、当該地域の社会科学分野の研究が進み、多くの知的成果が得られた。しかし、人文科学分野に限れば、その進展は必ずしも順調とは言えない状態であった。四半世紀にわたり本務校の東京外国語大学でタイ文学の研究、教育を行ってきた代表者としては、タイ文学の研究は政治学、経済学などの社会科学的アプローチと並んで、タイ人の価値観、規範意識、世界観といった知的営為の体系的理解に道を拓くもので、その成果は超域的に他の学問分野でも応用できるものであるという観点から、本研究を魁としてより一層タイ文学研究を深化させていく必要を痛感していた。

(2)日本におけるタイ文学研究の成果は、戦後から 2014 年までに約 300 点の翻訳がある。これが分量的には世界トップであることは事実としても、それに平行すべきタイ文学史、作家論、作品論の研究はまだまだ端緒についたばかりの状態である。そこで本研究の代表者は、今後の日本におけるタイ文学研究の深化にこの方面で学問的貢献を果たすと同時に、その成果を歴史学、思想史、宗教研究など他の人文科学研究へも応用してもらおうと考えた。

２．研究の目的

(1)タイ近代小説の叙述形態を含めた構造的特質、人間認識の方法やモチーフ、登場人物の自然観や行動様式の分析を通じて、各作品中に通底するタイ人の思考様式（認識方法）やその時代特有の心性を明らかにする。それにより、経済、政治的面の理解に偏重してきた日本人のタイ認識に新たな文化的視座を提供する。

(2)タイ近代小説の物語構造に見る通時的特質の究明。多くのタイ近代小説の顕著な特徴の一つに「エピソードの連環体構造」がある。物語の完結性という近代小説の約束事を無視したようなこの種の小説に内在する通時的特質を、宗教を含めたタイ文化全体の中での文学の位置づけという観点を中心に、具体的作品に基づいて分析する。

(3)小説に現われた人間、社会、自然認識の比較分析。多くのタイ近代小説の主人公は教師、医師などの知識人である。これらの人物の思想や行動における人間・社会認識にはマニフォールド性が希薄である。さらに 1970 年以降に登場した「ルン・マイ」（新世代）作家の社会主義リアリズム的小説は、日本におけるプロレタリア文学のリアリズムと比較してその人物像の描写や社会認識に大きな隔たりがある。近代小説の出発点における時代状況を浮き上がらせつつ、コード分析を用いてその根底に横たわる意識を究明する。

(4)小説ジャンルを文学社会学的観点から見た場合の価値意識の分析。タイの近代文学には翻訳小説を除いて探偵小説はなく、虚構の世界に遊ぶ遊戯感覚の欠如が顕著である。また欧米や日本文学のような紀行文学もない。芸術一般を見渡しても職人芸や匠芸への関心も薄く、遠藤周作ほかのような異教徒の人間・社会認識をテーマとする小説もない。これらの小説ジャンルの欠如から見えてくるタイ人の価値意識を文学社会学的観点から分析する。

３．研究の方法

(1)本研究では、文学批評理論のうちでも、作品をディスクール世界における特殊な編成として理解する「構造」、「物語」分析を中心に据え、より大きな文化的コンテクストにおける作品解釈に時代とその心性から迫るアプローチ法を併用した。

(2)3 年間を通じ、日本では本務校の東京外国語大学図書館をはじめ、東京大学図書館、京都大学東南アジア研究所附属図書館、タイでは国立図書館、チュラーロンコーン大学図書館、カセサート大学図書館などで関連資料を収集し、作品毎の解題を通じたデータベースを作成した。

(3)クラープ・サーイプラディット（1905～74）が主宰した若手作家集団が発行した月刊文芸誌『スパープ・ブルット』はタイ近代小説の初期に活躍した作家たちの文学観や創作技法を知る上で特に重要であり、バックナンバーの収集やコピーに努めた。収集した作品は優先順位をつけた上で、随時、解読と分析を行い、最終的にはあらかじめ決めておいたコードに従って分類した。

(4)本務校の夏期休業期間を利用して訪タイし、日本では閲覧、収集が不可能なタイ字新聞連載の近代小説の閲覧とコピーを行った。平行して、タイ近代文学研究者として多くの実績を上げているタマサート大学文学部チューサック・パットラクンワーニット准教授、カセサート大学人文学部のソーラナット・タイランカ准教授、日本・タイ文学比較研究者のチュラーロンコーン大学文学部ナムティップ・メートセート准教授の諸氏と研究テーマに関する意見交換を行った。

４．研究成果

(1)平成 24 年度～26 年度の 3 年間にわたり研究課題「タイ近代小説の構造的特質の研究」に必要な関係資料（日本語書籍、欧米語文献、タイ語文献、聞き取り調査）を収集することがほぼ予定通りできた。

(2)タイ近代小説の叙述形式を含めた構造的特質、人間認識のモチーフ、登場人物の自然

観や行動様式の分析を通じて、書く作品中に通底するタイ人の思考様式（認識方法）やその時代特有の社会的心性を明らかにするため、農村･農民を描いた小説ジャンルを題材として、人物像の描写や社会認識を「読みのコード」（読者への読みの指標）を主要ツールに用いて分析した。具体的成果は以下の通りである。

①2012 年度。タイ近代文学の成立から発展期にあたる 1920 年代～1970 年代（一部は 1980 年代初期）までの農村･農民社会を描いた諸作品の比較分析によって、作者、題材、思想、叙述の方法などが以下の 4 つの時期に大別できることが明らかとなった。

近代文学成立時の 1920 年代後半から太平洋戦争勃発時まで：作者も読者も共に近代的教育を受け、欧米文化に対する一定の素養を身につけた知識人である。そのため、この時期の諸作品では「モダニズム」と「人道主義」が主要な主潮として立ち現れている。またこの時期の小説に登場する農村・農民は観念の産物である。シーブーラパー（1905～74）の『人生の闘い』（1932）やセーニー・サオワポン（1918～2015）の『敗者の勝利』（1943）がその代表例と言える。

戦後～1973 年学生革命までの時代：この時期の前半は、戦中・戦前を通じてピブーンソンクラーム政権が推進した国家主義政策が放棄され、それに抵抗していた作家たちがこぞってタイの農村を描いた。注目すべきは、この第 2 期の後半になって初めて、農民作家が誕生したしたことである。『金色の脚の蛙』（1958）、『借金百姓』（同）などを書いたラーオ・カムホーム（1930～）がそうである。この時期は観念的な描写とリアルな農村・農民描写が混在した時代である。同じ知識人階級出身であっても詩集『東北』（1957）のナーイ・ピーや『空は遮らず』（1958）のラーオ・カムホームなどで描かれた農村･農民像はかつてないほど実情に肉薄し、内側から見た彼らを描写できている。その理由は彼らの生活拠点が農村にあったからである。

1973 年～1982 年まで。この時期には思想表現の自由がかつてなく謳歌され、一般国民の政治意識の高まりのなかで、民主化闘争に参加した経験を持つ若手作家達が労働者や農民の闘争をテーマにした小説を書いた。しかし、依然として農民の生活とは遊離したところから農民を社会的弱者と決めつけ、作者自身の思想信条を語った作品が多く、現実の農村社会の仕組みや農民の精神を客観的に描くには至らなかった。その一方で、ニミット・プーミターウォン（1935～81）など農民出身の作家や地方教師出身の作家たちが発表した小説では、迷信や泥棒や借金や風土病といった農村特有の問題と格闘しながら逞しく生きる等身大の農民を描いた。

チャート・コープチッティ（1954～）の『裁き』（1982）以降である。『裁き』では農村の貧困や農民の無知は重要な要素ではなく、普通の人間の心理に焦点が当てられていて、農民大衆はつねに非抑圧者だという、従来の農民文学によくみられた固定観念から脱却している。この作品は従来のイデオロギー優先の観点的な農村･農民描写に終止符を打った、タイ近代文学史上の記念碑的な作品である。『裁き』以降は、農村や農民を描いたタイ小説の数は次第に減っていく傾向にある。そこには農地改革と高度成長によって小作農や貧農が消滅し、それとともに農民文学が終焉した日本と似たような構図を見ることができる。

②2013 年度。ドークマーイ・ソット（1905～63）の太平洋戦争期の農村小説『良き国民』（1947）に現れた以下の 3 つの文化的コードの詳細な分析を通じて、根源的な都市・農村の価値対立が象徴的に描かれていることを発見できた。

・文化的コード 1：「汽車」と「牛」、または「中心」と「周縁」。この小説には、都市と農村、あるいは「中心」と「周縁」という対立構造がはっきりと描かれている。バンコクという面と、そこから主人公マーイが乗り降りする駅まで延びた点と線が「中心」、駅前の桟橋で渡し船に乗った地点とその先の対岸に広がる農村が「周縁」である。駅は、この両者を隔てる障壁として象徴されている。マーイはその「中心」と「周縁」の 2 つの空間を隔てる壁を恒常的にくぐり抜ける存在である。それはたんなる空間移動ではなく、一つの価値観の支配する次元から別の価値観を有する観念世界への移動でもある。この「中心」と「周縁」という概念が、「汽車」と「牛」ということばで端的に象徴されている。

・文化的コード 2：「国の法律」と「村の掟」。『良き国民』での唯一の出来事は牛泥棒である。農民にとって牛を盗られることは生活の困難に直結する問題であるが、それは日常生活で頻繁に起こる出来事でもあり、農民たちは昔から伝わってきた正しい対処法を知っている。牛泥棒の側と被害にあった側に通じる回路があって、仲介人を通じて牛の身代金を交渉するのである。当事者たちは牛泥棒が犯罪であることは認識しているが、警察や法律に訴えることはしない。ここに泥棒と被害者の間に奇妙な利害関係の一致が生じる。これが「村の掟」である。しかし、中央官庁の管理であるマーイには村の掟は理解できない。犯罪は警察によって摘発され、犯罪者は「国の法律」によって処罰されるべきだというのが、彼の近代国民としての素朴な意識である。ここには、「国の法律」というコードと「村の掟」というコードの対立がある。

・文化的コード 3：「遠い戦争」と「手近な平和」。『良き国民』には、太平洋戦争の戦況に関する話題が 3 カ所、ピブーンソンクラーム政権の推し進めた「ラッタニヨム」政策に関

する話題が 2 カ所出てくる。一見すると物語の展開とは直接の関係がないようだが、作者はそこに時の政治に対する諷刺を忍ばせている。テクストを読む限り、夫婦の戦争観といえば、今の戦争は日本と連合国という余所者がタイの領土で行っているはた迷惑な行為であり、疎開に追い込まれた自分たちは被害者だという考え方が強い。ここには自分たちには無縁の「遠い戦争」というコードと、必要なのは「手近な平和」だというコードの対立がある。全体をとおしてこの作品には、マーイを道化師にした著者ドークマーイ・ソットの「ラッタニヨム」への嫌悪感がよく現れている。

③最終年度である 2014 年度。タイ近代小説には、欧米にはあまり見られないが、日本では時に散見される、通時的特質と共時的特質の 2 つの共通する特徴を日本の近代文学との比較研究の過程で発見できた。具体的な研究成果は以下の通りである。

通時的特質：
（その 1）文化全体の中での文学の位置づけが宗教や思想といった大きな体系の一部に過ぎず、中心的役割を担うに至らなかった。文学が哲学や思想の役割まで代行した日本とは違い、中国型に近い。タイでは 20 世紀初頭まで国王が仏教的王権思想やヒンドゥー教的王権思想に基づく絶対的な政治権力を有し、文化的営為はほとんど王都中心に成立していた。文学は、例外的な作品を除く大多数が国王の威徳を賛美したり、仏教の教えを説いたものだった。王都から地方への文化的発信はほとんどなく、農村社会にはジャータカ物語や異国の説話などの口承文学、土着の民衆舞踊、歌謡などがあった程度である。タイでは文学以外に何が優勢な表象文化だったのか。それは仏教、宗教建築、絵画、造形美術ではなかったかと思われる。そのほか舞踊、仮面劇などはあくまでも仏教的帰依であって、娯楽的要素は少なかった。そのため、西洋や日本に見るような、芸術の追求による人間性の是認や解放などの新たな価値創出がなされることはほとんどなかったと考えられる。
（その 2）表現手段の歴史的発展に明らかなように、韻文文学から近代文学への移行が連続性を保った日本とは異なり、タイ近代小説では表現形式も物語内容も前近代文学とは断絶した。「もののあはれ」、「侘び」、「さび」、「幽玄」、「粋」といった美意識は一部古くなりつつあるものの、それでも日本人の感性を表す言葉として廃れることなく生き続けている。こうしてみると、日本の形式と内容の移行は連続型であると言える。タイでは、1900 年代後半に欧米留学をしたり、近代教育を受けた人々が散文小説を書き始め、今日ではそれがすっかり定着した。しかし、詩については第二次世界大戦までは自由詩はなかなか人々に認められていない。反体制詩人が自由詩をもって民衆に理不尽な支配への反抗を訴えたこともあったが、主流となることはなかった。では、「わび」「さび」のようなかつての日本人に階層を問わず見られた共通の感性は何かといえば、タイではやはり仏教の無常観が唯一それに当たるだろう。しかし、現代タイの定型詩人たちが主として歌うのは、腐敗した社会の告発、失われていく自然と人間破壊への警鐘などであって、かつての定型詩の内容とは全く違ったものになっている。

共時的特質：
（その 1）欧米近代小説の主要特徴である心理描写が決定的に少なく、叙事詩的な単発のエピソードの連環体（数珠つなぎ）構造をもつ長編小説が多い。欧米や日本の近代小説の場合、エピソードＡがあるとすると、エピソードＢは確かな論理的必然性を持ってＡの後に置かれる。この順序が逆になると、その小説の物語としての構想全体が壊れてしまうので、ＡとＢの順序は変えようがない。しか例えばカンプーン・ブンタウィーの『東北タイの子』は独立性の高いエピソードの数珠つなぎ構造になっている。一つの章が一つのエピソードから成っており、それぞれのエピソード自体が完結し、横の繋がりはない。つまり、そうしたエピソードが単に時系列に沿って並列的に配置されているだけで、実はどういう順序に並ぼうが全体への影響はほとんどない。しかも、ある時点で必ず完結しなければならないという物語としての必然性もなく、その分量は著者のエネルギー次第といった風である。タイの古典文学や近代小説の場合には、大なり小なりこうした物語として最も単純かつ安易な構造が非常に多く見られる。
（その 2）人間や社会の描写に多面性、重層性が見られず、人物の思考や行動様式が画一的であること。登場人物の性格がたいてい画一的、不変的で、悪くいえば善玉、悪玉がはっきりし過ぎており、しかも主人公の思考や行動の多くが常識人である読者の想像の範囲内にとどまっていて、価値創造的な動きをなかなかしてくれない。主人公が教師や医師や弁護士などの知識人であれば、最初から人格的に完成した啓蒙的人物（シーブーラパー『未来を見つめて』、セーニー・サオワポン『その名はカーン』、『妖魔』など）であり、ジャーナリストは民衆派の人物、労働者であれば人権と平等思想に覚醒した進歩的人物（シーブーラパーの「もっと力を」など一連の短編）、農民であれば農業改革の志に燃える青年か素朴でお人好しで迷信深い老人（ニミット・プーミターウォンやラーオ・カムホームの小説）といった具合である。アンチ・ヒーローを含めても同じことが言える。社会に対する認識の平板性も気になる。作品中の農村社会のイメージは戦前、戦後にかけて書

かれた農村像と較べてあまり変わっていない。現実の農村社会はたえず変容しているが、現代のタイ農村に生きる人々の生活と思想を正面から小説にとりあげた作品はまだまだ少ない。

（その 3）伝統的価値観や宗教の影響を受けた価値基準から作者も読者も自由でなく、他の文明圏の世界観や価値意識との比較を通じて自己を相対化させる近代小説がほとんどない。タイには民族、仏教、国王という国体原理がある。これは近代史の中で人為的に作られた原理でだが、タイ国内では小説という虚構の世界においてすらこれを否定したり、批判することは長い間許されなかった。大多数のタイ近代小説にみるように、都会生活者が主人公である場合でも、日常における宗教生活は確かに農村ほど濃密ではないとしても、仏教徒の生活態度を身につけ、仏教の通俗道徳や社会通念を根本的に疑うことなどない人物として描かれている。日本の近代小説に普通に見られた、キリスト教徒が主人公の小説はタイにはほとんどない。つまり、仏教や仏教徒の外部にある世界観や価値意識に対して関心を注いだり、異なった価値観との比較で自己を相対化して見つめる作家や作品がひじょうに少ないということができる。

（その 4）悲劇の物語が少ない。タイの古典文学には『プラロー物語』、『クンチャーン、クンペーン物語』という悲劇文学があった。しかし、古典文学の中で悲劇と言える作品はこの 2 作ぐらいで、近代文学では圧倒的にハッピーエンドのストーリーが多い。タイ人一般にとって、人生は「四苦八苦」という仏教用語にあるように不安と挫折と葛藤に満ちている世界であるが、他方、タイの場合には仏教がその解決の仕方を見事なまでに提示してくれている。救済の道筋はとうの昔に誰の目にも明らかに示されていて、個人の選択としては、出家して涅槃の境地を目指すか、在家のまま大きな功徳を積み来世に期待するか、という実に狭い選択が残されているだけである。つまり、自らこの個人、社会の矛盾や不条理の解決に挑む必要はない。解決の道は仏教によって示されているわけだから、悪戦苦闘して自分で新たな精神的安寧の世界を切り拓くなどというのは全く無駄な努力と考えることができる。他方、人間が悲劇に遭遇するのは、因果応報であったり、前世の業であったり、在家信者としての社会通念から外れた行動をとったため、つまり反仏教的な生き方が招いた結果ともいえる。こうして、悲劇の主人公＝反仏教的な生き方をした人物＝読者の共感を呼び起こさない人物、という構図で捉えられているのかもしれない。

（その 5）文学のジャンル、その他に見る特徴。タイでは過去の日本と違って文学を純文学や大衆文学という枠組みで捉えることはない。さらに興味深いのは、近現代以降のタイ文学の中には国民に幅広く受容された国民文学というものが存在しないという事実である。正確に言えば、この状況は近代以降の文学作品についてであって、それ以前には『ジャータカ物語』や『ラーマキエン』などの口承文学が国民文学だったとも言える。近代でいえば、中国歴史小説のタイ語訳『三国志演義』やヤーコープの歴史小説『十方勝利者』などがかろうじて挙げることができる。

（その 6）タイ近代小説には啓蒙的、道徳的な小説が多い。タイの小説家には私小説の伝統もないことは上記で述べた。それとの関連で言えば、タイ近代文学の伝統には、文学を社会問題や道徳の腐敗を訴える手段に用いる自然主義（リアリズム）の傾向が強くあって、芸術至上主義はどちらかと言えば旗色が悪い。タイの小説家の中には、日本やフランスに見られた、倦怠に蝕まれた耽美主義者やデカダンタイプの人物はほとんど見あたらない。サー・アーサー・コナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」シリーズはかなり早い時期（20 世紀初め）にタイ語に訳されているが、彼が生み出したホームズという人物が、事件のない時は倦怠の虜であって、麻薬注射によって夢想の世界に遊ぶ人間であることはタイでは全く無視されている。タイの作家で最も多いタイプは教師的な性格の人物である。

（その 7）推理（探偵）小説の欠如。20 世紀までのタイでは外国からの翻訳を除いたタイ独自の推理小説、探偵小説が盛んではなかった。推理小説というのは、犯罪を倫理的に追求することはせずに、虚構として組み立てられた世界の精緻な構造を解明し、将棋の詰めのように犯人を追いつめていく約束事の世界、つまり遊戯の世界である。タイでこのようなジャンルの小説が流行らないということは、極端に言えば遊戯感覚が欠如していることを示しているのだと思われる。これは、多くのタイ人の関心がリアリズム、つまり五感による確かな手応えを得られる世界に限定されており、観念世界に遊ぶことに価値を見いだせないからだろうと推測される。このことは、タイ人がどちらかといえば感覚的、現実的な価値の追求に重きを置く姿勢と関係があるだろう。職人芸、匠芸の伝統の不在もまたこうした文学における遊戯感覚の欠如と関係しているように思われる。認識の境界をどうしても五感による手触りの及ぶ世界にとどめ、そこにだけ価値を見いだそうとする価値観を認めることができる。

（その 8）紀行文学の不在。タイでは、「旅行」に当たる語は「パイ・ティオ」か「ドゥーン・ターン」と言う。「パイ」が「行く」、「ティオ」は「遊ぶ」なので、直訳すると「遊行」となる。また「ドゥーン」が「歩く」、「ターン」は「道」を意味し、これは「道行き」といった意味である。この両方ともが日本語の「旅」の語感をもつ語ではない。つまり、現実的な目的を達成するためでなく、精神の慰撫と再生のために、あるいは遊戯感覚で、目

的地も定めずふらっと旅に出るといった感覚はタイ人にはないように思われる。なるほど、タイ古典文学のジャンルにはニラートという紀行詩のジャンルがある。しかしそれは、例えば国王が仏足跡寺院のような地方の名刹へ行幸された時に同行した詩聖スントンプーのような宮廷詩人が、国王を慰めるために花鳥風月を愛でたり、あるいは国元に残してきた恋人への愛を詠ってあげたもので、『奥の細道』のような旅行文学とは別のものなのである。近現代においてもまた、タイ文学は旅行文学の傑作を生み出してはいないように思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）
①宇戸清治、「ドークマーイ・ソットの短編『良き国民』における文化的コード」『東京外国語大学論集』第 86 号、2013 年 8 月、p.205～p.224
②宇戸清治、「タイ文学は日本でどのように読まれてきたか」『PRAKOT(Thai Contemporary Literary Journal』Vol.1、2014 年 1 月、p.96～p.107

〔学会発表〕（計　2　件）
①宇戸清治、「日本におけるタイ文学の受容：歴史と現在」（タイ語）、タイ国立カセサート大学人文学部、2014 年 1 月
②宇戸清治、「日本におけるタイ文学翻訳の歴史と課題」、日本タイ学会タイ文学セッション（兼コメンテーター）、横浜市立大学、2013 年 7 月

〔図書〕（計　2　件）
①宇戸清治、綾部真雄編『タイを知るための 72 章』(34 章「タイ語の成り立ち」、35 章「王語、僧語」、53 章「古典文学、近代文学」、55 章「近現代タイ美術」、56 章「越境するタイ映画」)、明石書店、2014 年 7 月、438 頁
②宇戸清治、今井昭夫編『東南アジアを知るための 50 章』(21 章「ラーマーヤナの変容」、24 章「東南アジアの映画事情」、26 章「東南アジアの近現代美術」、42 章「ポピュラー・カルチャーをめぐる日本と東南アジア」)、明石書店、2014 年 4 月、450 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
宇戸 清治（UDO SEIJI）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：30185053